小林直之（編集者／東北大学出版会）

1972年仙台市生まれ。明治大学文学部卒業。東北大学出版会事務局長。大学出版部協会理事。宮城教育大学非常勤講師。時事通信等に文芸・ノンフィクション作品の書評を執筆。河北新報にエッセー「とうほく本の散歩道」を連載中。

【総評】今年開催された「サンモール古本市 in 金港堂2F」は素晴らしかったです。老舗新刊書店さんの2階フロアで、地域ゆかりの古書店さんが古本を売るという大胆な試み。本を探すこと、本を買うこと、本を読むことの幅広さと奥深さを実感しました。

①『踊る熊たち　冷戦後の体制転換にもがく人々』／ヴィトルト・シャブウォフスキ（芝田文乃訳）／白水社／3300円
今年一番の本です。「踊る熊」とは、欧州各地に伝わる大道芸の一つ。熊使いのロマ（かつて「ジプシー」と呼ばれた移動生活民族）は生後数か月の子熊を親に懐かぬうちに買い、様々な奇妙な芸を仕込みました。2007年にブルガリアがＥＵに加盟すると当地の踊る熊たちは非合法になり、動物保護団体が熊使いから熊を引き取って野生に戻すプログラムを進めました。第一部ではそんな熊たちの数奇な姿が描かれます。続く第二部に登場するのは共産主義崩壊後の変革にさまよう人々。カストロを信奉するキューバのダンサー、ポーランドの路上生活者、グルジアの「スターリンの巫女」……。本書はこの両者を対比しなぞられることで、きわめて複雑で時に命を奪われかねない「自由」を浮き彫りにしていきます。硬質かつ悲哀をまとった文章で記される「自由」の正体。踊る熊たちの物語が、迷い生きる人間の物語と皮肉なまでに重なり合います。

②『アーカイブの思想　言葉を知に変える仕組み』根本彰／みすず書房／3960円
専門書ですが興奮しながら読みました。著者は図書館情報学の泰斗で図書館に関する著作多数。本書は、図書館が持つアーカイブ（記録の保存・保管）の機能をメインに、思想・文化・教育といった人文知のネットワークについて縦横に語るものです。オビにある「個人を助け、社会を支える」という言葉が図書館の存在意義の本質をとらえ、それにサブタイトルが呼応します。レファレンスの語源や江戸期の識字リテラシー、読者の誕生、教養主義など、本と読書が好きな方なら思わず引き込まれる話題が随所に登場。図書館の役割から入り、本の役割に至る、知的探求に満ちた読書を味わえます。

③『土偶を読む――130年間解かれなかった縄文神話の謎』／竹倉史人／晶文社／1870円
「縄文時代に大量に造られた素焼きのフィギュア＝「土偶」。カバー袖にあるこの文章に心を掴まれました。土偶は「妊娠女性説」や「地母神説」などがあるものの、いずれも確証は得られておらず、その正体は謎のままだとか……。「ついに土偶の正体を解明しました」と始まる本書は、土偶の造形を具体的かつ写実性に富むものと捉え（通説の正反対です）、「土偶は●●の姿をかたどっている」と結論付けします。「●●」が何かは実際に本書を開いてください。「え？」と驚き、その一見不思議な説にどんどんはまり込んでいくこと間違いありません。今年世界遺産登録が決まった「北海道・北東北の縄文遺跡群」の、まごうことなきイメージキャラクターの土偶。その奥深い世界をぜひ本書でご堪能ください。

④『言語学バーリ・トゥード　Round1　AIは「絶対に押すなよ」を理解できるか』／川添愛／東京大学出版会／1870円
この本、ホントに面白いんです。言語のもつ不思議な面白さに夢中になりました。冒頭の章タイトルは「「こんばんは事件」の謎に迫る」。はい、ここで「こんばんは事件」をすぐに理解できる方は、絶対にこの本を楽しむことができるはずです。「ドラゴンという名の現象」。はい、ここであの妙な声色を思い出す方は、絶対にこの本を買って読むべきです。まさに、なんでもあり（＝バーリ・トゥード）な異色の言語学書。読んで損はありません。

⑤『中国料理の世界史　美食のナショナリズムをこえて』／岩間一弘／慶應義塾大学出版会／2750円
ボリューム満点の一冊。でも、魅力はそれだけではありません。「本書にとって中国料理は、世界史を見通すためのレンズであり、世界史を描き出すための切り口であり、世界史を織りなすためののりしろである」。こんな魅力的な誘い文句にいざなわれ、政治・社会・文化まで様々な彩りをまとう中国料理の姿が描かれます。分厚い本ですが、はじめからおわりまで、存分に味わい尽くしました。

⑥『国語をめぐる冒険』／渡部泰明、平野多恵、出口智之、田中洋美、仲島ひとみ／岩波ジュニア新書／968円
良書です！　ちょっと勉強するつもりで読み始めたら、著者たちが挑む「冒険」に引きずり込まれ、いつの間にか自分まで冒険をしているような気分を味わいました。国語を学ぶとは、なんと奥深く、驚きに満ち、エキサイティングなことか。レーベルから言えば中高生くらいが対象かもしれませんが（その年齢でこの本に出会えたら最高です！）、大人でも間違いなく刺激を受けるはずです。そして、もし家の押し入れに昔使った国語の教科書があるなら、久々に読み直したくなると思います。

⑦『人類とイノベーション　世界は「自由」と「失敗」で進化する』／マット・リドレー（大田直子訳）／NewsPicksパブリッシング／2860円
「昨日までは無かったもので、今日は当たり前に使っているもの」。これは「イノベーション」を説明するときによく聞く喩えです。スマートフォンやタブレット端末がそうだったかもしれませんし、家電製品、自動車、エネルギー、食品、さらには様々な制度やシステムもそうかもしれません。本書は、そんなイノベーションの本質を考える一冊。「エジソンは発明家ではなくイノベーターだった」「誰もが「ウマのほうが便利だ」と信じていた」「ジャガイモというイノベーション」「水洗トイレのイノベーターたち」「「タバコ」という人類最悪のイノベーション」「人類最古のイノベーションは「農業」である」…そんな目次の項目を見るだけで、予測できず謎が多く、協力と共有と偶然を必要とするイノベーションの魅力に惹かれるはずです。そしてたぶん、身の回りの当たり前のものやことに、感動を新たにすると思います。

⑧『時間軸で探る日本の鳥　復元生態学の礎』／黒沢令子、江田真毅編著／築地書館／2860円
太白区八木山にある動物公園に行って最も長く過ごすのが、猛禽類の檻の前です。二ホンイヌワシ、オオタカ、ハヤブサ、チョウゲンボウ……。たまに地面を歩いていたりすると、「あ、この姿、もしかして恐竜っぽいのかも」と思ってしまいます。本書は、日本に住む鳥の歴史を「復元生態学」という手法で探るもの。まずは化石から「いつ、何が、どこにいたか」を判断し、続いて人間の先達による絵画資料などから「どのような鳥が、どこにいたのか」を見極めます。さらに、地球規模の環境変化を受けて、日本列島に生きてきた鳥たちが今後どのようになっていくのかも検証。50年後、100年後の動物公園の檻には、どんな猛禽類がいるのか。長い時間軸で見ていくとわかる日本の鳥たちに深い愛情をいだく一冊です。

⑨『沈没船博士、海の底で歴史の謎を追う』／山舩晃太郎／新潮社／1959円
水に沈んだ遺跡の発掘調査を行う「水中考古学」「船舶考古学」なる学問。実に魅力的です。水中遺跡はタイムカプセルで、海底で砂に埋まっている古代船の船体や積み荷はまるで昨日沈んだかのように美しいとのこと。この保存状態のおかげで、その船のかたちや積み荷から推測を重ね、当時の人々の貿易システムをかなり詳しく再現できるそうです。ただし、その研究には苦労も多く……。英語力ゼロから単身でアメリカに留学し、憧れの水中考古学者となって世界の海でタイムトラベルする毎日。そんな自身の姿をユーモアたっぷりに記した好著。面白いです！

⑩『ブックセラーズ・ダイアリー　スコットランド最大の古書店の一年』／ショーン・バイセル（矢倉尚子訳）／白水社／3300円
本を買いに行ったはずが、本屋を買ってしまった。そんな、ある意味で理想を現実にした男性の備忘録（日記）です。古書店を訪れる人（＝客ではないような気が……）は様々で、値段への文句、知識の披露、探している本が店にあると不機嫌になる（その気持ち、わからないでもないけど……）など困ったことばかり。本好きとはこんなに偏屈なのか……と胸に手を当てたくなりますが、中には心温まるエピソードも。本好きに悪い人はいませんよね。

荒蝦夷の本　好評発売中

365日目〈塔短歌会・東北〉震災詠の記録
塔短歌会・東北［編］
梶原さい子、花山周子を核にひきとる24人の1273首。震災から8年間の歌集。
本体2700円+税　2021年2月刊

百年の孤舟　志賀泉［著］
文学治療作家が故郷・福島県南相馬市小高を舞台に描く深身の短編集。
本体1800円+税　2021年3月刊

震災学 Vol.15　東北学院大学発行
赤坂憲雄／藤原辰史／熊谷達也／和合亮一／柳美里／黒木あるじ／中俣映生／東雅夫／佐藤厚志住が〔第4回仙台短編文学賞受賞作発表〕
本体2000円+税　2021年3月刊

杉村顯道作品集 伊達政宗の手紙　杉村顯道［著］
怪談文芸の匠、新発見の深傳小説や捕物帳、時代小説、青春小説をここに。
本体3000円+税　2021年7月刊

仙台路地裏
＜古本あらえみし＞絶賛営業中！
仙台駅にいちばん近い古本屋。東北ゆかりの作家から民俗・歴史、仙台・宮城の本、震災関連、ミステリ、幻想文学、写真集まで。充実の品ぞろえ！
■平日・土日祝　12:00～19:00／水曜定休
〒983-0862 仙台市宮城野区榴岡4-7-12
TEL&FAX 022-298-8455
※仙台駅東口ひり徒歩5分、テンポホテル・仙台スターシャ裏手。地下鉄宮城野駅［北2出口］が便利です
（有）荒蝦夷　http://araemishi.a.cooc.an.jp/　Twitter@araemishi

Kappo 仙台闊歩
1月号発売中
820円／ネーカラー／120頁
宮城県内の書店でお買い求めください

PRESSART　〒984-8516 仙台市若林区土樋103番地　TEL.022-266-0911　FAX.022-266-0913

東北の発酵
part1.発酵とおつくり　秋田県湯沢市・横手市／岩手県陸前高田市
part2.東北、発酵食品の今　秋田、山形、宮城、福島
仙台の舞風来、記来、書店員etcが選ぶ **2021年、今年の3冊**

発酵特集　味噌・醤油、納豆、日本酒、ワイン、クラフトビール

東日本大震災からのスタート
―災害を考える51のアプローチ―
東北大学災害科学国際研究所　編
B5判／並製本／3,300円（税込）

人文社会科学ライブラリー第5巻
ほんとうのことば
戸島貴代志　著
四六判／並製本／2,750円（税込）

東北大学教養教育院叢書　人学と教養第4巻
多様性と異文化理解
東北大学教養教育院　編
A5判／並製本／2,750円（税込）

〒980-8577　仙台市青葉区片平2-1-1　東北大学構内
電話022-214-2777　FAX022-214-2778
e-mail info@tups.jp　URL http://www.tups.jp

コロナに負けるな第12回！
仙台ホラ吹編集者3人衆
おすすめ本ベスト5
2021

東北大学出版会　フレスコート　荒蝦夷
小林直之・川元茂・土方正志
【トークイベント】
ものを館立チーブン大学「在仙編集者3人ひしゃべりまくる年末・年始におすすめの本2021年版」
日時：2021年12月17日(金)19:00～20:00
場所：泉パークタウン　ものを南館1階
TEL.022-375-8808◎http://fm797.co.jp/tapidai/
入場無料・予約不要
出演／小林直之・川元茂・土方正志

ソーシャルディスタンスを取りながら開催します
2021年　冬

川元茂（編集者／Kappo 元編集長）

1967 年宮城県生まれ。東北学院大学法学部卒業。プレスアート取締役地域メディア局長。タウン情報全国ネットワーク理事。仙台短編文学賞実行委員会事務局長。今年は Kappo『10 年目の姿』特集、『昭和を探して』特集、菅野正道著『伊達の国の物語』、『コレカラの教科書』などを編集しました。

【総評】 ドラマばかりを観た 1 年でした。海外物はデンマークが舞台の政治ドラマ『コペンハーゲン』（Netflix）。同じくデンマークのクライムサスペンス「TOP DOG －勝者の階段－」（WOWOW）、国内物だと『密告はうたう　警視庁監察ファイル』（WOWOW）、『大豆田とわ子と三人の元夫』（カンテレ）が良かったですが、忘れてはいけないのが『おかえりモネ』（NHK）、けっこう泣きました。11 月から Yahoo！に原稿を書くようになりましたので、ご一読いただければ。

①『細野晴臣と彼らの時代』／門間雄介／文藝春秋／ 2420 円
②『風街とデラシネ　作詞家・松本隆の 50 年』／田家秀樹／ KADOKAWA ／ 2860 円
1980 年代の元はっぴいえんどメンバーたち（細野晴臣、大滝詠一、松本隆、鈴木茂）の活躍はリアルタイムで体験していましたし、そこから遡って大学生の頃ははっぴいえんどの CD を繰り返し聞いていました。しばらく離れていた時期もありましたが、日本のシティポップの再評価や、今年『ロング・バケイション』発売 40 周年というエポックもあり、さらにこの二冊の評伝が発売され、いま私は「はっぴいえんどを源とするジャパニーズポップスの沼」にはまっています。細野は 72 歳、松本は 70 歳になり、古希を越え、キャリア 50 年を迎えました。ともに偉大な音楽家の足跡を、貴重な証言とともに記録したノンフィクションですが、アプローチが異なります。『細野～』の著者は、音楽雑誌の元編集者で、細野とは親子ほど年が離れています。半生を俯瞰すべく、長時間のインタビューを敢行し、次第に戦後日本の重要な音楽史を、事実のみに基づき嘘なく記述しなければいけないという責任感と使命感を持つようになります。こちらは客観的な評伝と言えるでしょう。一方『風街～』の著者は松本と同世代で、のちに「英語日本語論争」と呼ばれる大滝詠一と内田裕也の座談会を書き起こした編集者です。松本の詞を引用しながら、日本のポップスに革命をもたらした言葉の魔術を自らの解釈とともに紐解いていきます。

③『複眼人』／呉明益（小栗山智訳）／ KADOKAWA ／ 2420 円
『歩道橋の魔術師』などで知られる台湾の作家の待望の邦訳です。海洋ごみやゼロカーボンなど環境への負荷が人類全体の大きな課題になっていますが、太平洋に巨大なごみの渦が漂流しているというニュースから着想を得た著者は、ごみの島が台湾に押し寄せる近未来を舞台に、神話と幻想を融合させながら、一方でリアルな環境破壊がもたらすディストピアを暗示させる壮大な物語を描きました。2011 年に書かれた作品ですが、まるで予言の書のよう。単なる SF 的アプローチにとどまらず、登場人物たちが傷つき、葛藤し、戦い、運命に向かって歩き出す人生の物語を丁寧に描いているところに好感が持てます。またひとり好みの作家に出会えました。

④『2016 年の週刊文春』／柳澤健／光文社／ 2530 円
「『週刊文春』編集長の仕事とは、毎週毎週、億のカネを使って大バクチを打つことなのだ」。花田紀凱と新谷学という名編集長を狂言回しに、元文藝春秋社員が 20 歳以上離れた二人を軸に週刊文春 60 年の歴史を描いたノンフィクションです。「親しき仲にもスキャンダル」をモットーに、文春砲で名をあげた新谷編集長が、社長から 3 ヶ月の休養を求められ、すでに退職している花田元編集長に会いに行く場面からしてゾクゾクします。90 年代の「花田文春」はよく読んでいましたし、スクープの裏側や編集部の人間模様がとにかく面白いのです。「おじさん向上委員会」「顔面相似形」などの企画物や椎名誠、阿川佐和子、猪瀬直樹など毎週のエッセイもエネルギーに満ちていたし、規模やジャンルは違えど、同じ雑誌編集長をやっていた身として、「だから雑誌作りって面白いんだよね」と膝を打つ 1 冊です。

⑤『零の晩夏』／岩井俊二／文藝春秋／ 1980 円
去年は岩井俊二監督作品を集中的に観ていました。『ラストレター』からはじまり『Love Letter』『四月物語』『リップヴァンウィンクルの花嫁』などと立て続けに作品を鑑賞し、映像の世界観に加えて、前半と後半で転回する物語構成の妙に心惹かれていました。本書は美術雑誌の編集見習いの女性が、描かれたモデルは死に至るという噂がある謎の絵師の正体を探すアートミステリーなのですが、映画同様先が読めません。写実画家・三重野慶による美しく謎めいた横顔の表紙とストーリーが絶妙に絡み合います。映像化希望です。

⑥『父を撃った 12 の銃弾』／ハンナ・ティンティ（松本剛史訳）／文藝春秋／ 2420 円
「父と息子」小説が好きな私ですが、この「父と娘」小説もありだなと思いました。まず題名が素晴らしい。書店で見て「12 発も !?」と心の中で突っ込みを入れ、本書を手に取りました。舞台はアメリカ東海岸。父ホーリーと娘ルーは各地を転々としながら暮らしています。父は娘が 13 歳のときに銃の撃ち方を教えます。なぜ銃がこんなにあるのか、なぜ二人は定住しないのか、なぜ母がいないのか、謎が次第に明らかになっていきます。そして若きホーリーに残された傷痕をめぐるエピソード。美しい自然と父と娘の深い愛情が心を打つハードボイルド小説です。

⑦『サワー・ハート』／ジェニー・ザン（小澤身和子訳）／河出書房新社／ 3245 円
上海で生まれ、ニューヨークで育った中国系アメリカ人による自伝的短編集です。作家ミランダ・ジュライが「心の準備をしてから読んで」と推薦していましたが、確かにすごい毒と疾走感です。この語り口とトーンに一度はまったら逃れられないのではないでしょうか。極貧の暮らし、学校での差別、アイデンティティのゆらぎ、世代間の断絶など、中国からアメリカに移住した家族の物語を、当時子どもだった娘の視点で語るヒリヒリする小説です。

⑧『貝に続く場所にて』／石沢麻依／講談社／ 1540 円
第 165 回芥川賞受賞作です。宮城県出身者としては辺見庸さん以来 30 年振りの受賞で大きな話題となりました。主人公は西洋美術を学ぶためにドイツに留学している大学院生です。彼女が暮らす学術都市ゲッティンゲンに、かつて同じ大学で学んだ野宮という男性が訪れます。野宮は 9 年前、石巻の実家で波に飲み込まれ行方不明になったはずでした。野宮の来訪とともに、街で不思議な出来事が起き始めます。東日本大震災だけに留まらず、ナチスによる焚書、ユダヤ人の連行と収容所送り、度重なる空襲など、“土地が持つ記憶”を相対化した小説です。長い歴史の中でさまざまな災厄がもたらされた都市を舞台に、奇妙な喪失の物語が立ち上がります。

⑨『三体Ⅲ　死神永生』／劉慈欣（大森望、ワン・チャイ、光吉さくら、泊功訳）／早川書房／上下巻各 2090 円
『Ⅲ死神永生』を読み終えて、しばし呆然としました。ひとつは計 2016 頁にも及ぶ長い物語を読み切ったという満足感。もうひとつは第 1 巻の文化大革命から最終巻の結末までの気が遠くなるほどの時間軸と作者の無限に広がる想像力に唖然とさせられたのです。雲天明がもたらした「物語のない王国」という名のメッセージ（というか暗号）も良かった。ベストセラー小説ですし、評価も高いですから、あえて詳細を説明する必要はないでしょう。完結を記念し、作者と訳者と編集者と、計 5 冊を読み切った読者（自分含め）に敬意を表して 9 位に選びました。次は Netflix でのドラマ化が待っているらしいので、そちらも楽しみです。

⑩『文芸ピープル　「好き」を仕事にする人々』／辛島デイヴィッド／講談社／ 1540 円
2018 年、村田紗耶香『コンビニ人間』がニューヨーカー誌など十数誌でブックオブザイヤーに選ばれ、同じ年、多和田葉子『献灯使』が全米図書賞受賞します。そして 2020 年には小川洋子『密やかな結晶』がブッカー国際賞の最終候補に選ばれ、柳美里『JR 上野駅公園口』が全米図書賞を受賞します。いま日本の現代文学は英語圏で注目され、高い評価を得ています。作家で翻訳家でもある著者は、欧米の編集者や訳者たち（＝文芸ピープル）を取材し、その理由を明らかにしていきます。「世界の読者に訴える普遍性」「ユーモアと奇妙さ」など、日本の現代文学と世界をつなぐブリッジとは何なのか。終章には伊坂幸太郎作品のハリウッド映画化＆ 10 カ国で翻訳が決まっているという仙台と関連する話も載っています。

土方正志（編集者・作家・エッセイスト／荒蝦夷）

1962 年、北海道生まれ。東北学院大学卒。今年の〈荒蝦夷〉の大ニュースは『真田啓介ミステリ論集　古典探偵小説の愉しみ』全 2 巻（フェアプレイの文学／悪人たちの肖像）の真田啓介さん、第 74 回日本推理作家協会賞評論・研究部門受賞でした！

【総評】 ホントに今年は本が読めない年でした。２度の入院手術に故郷の不幸とどたばたじたばたが続き、落ち着いて本が読めなかったのですが、そこは仕事、ぼーっとアタマに入らなくとも、どこか上の空ではあっても、とにもかくにも読まねばならず、そんな今年の本たちであるからして、ちょっと奇妙なベストテンになっているかも。そこはご容赦を願って、さて、来年はいよいよ還暦です。

①『こうしてあなたたちは時間戦争に負ける』／アマル・エル＝モフタール＆マックス・グラッドストーン（山田和子訳）／早川書房／ 2090 円
昨今のブームもあってか、ＳＦをいつもより読みました。なかでもこれはクセもの、なにやらタイムトラベル技術を駆使して戦争中のふたつの勢力があって、そのそれぞれの女性エージェントが、なんと手紙をやり取り、彼女たちの「往復書簡」から「世界」が見える、そんな凝った構成が読ませます。なにせ時空を超えるふたりの手紙ですから、古代から未来まで、枠物語的なイマジネーションの広がりに幻想と幻惑の留まるところを知らず、もしかするとこれはもはやＳＦとは呼べないなにものかなのかもしれません。往年のサンリオＳＦ文庫にあっておかしくない逸品の香りを漂わせ、私はある種の幻想文学として読みました。

②『アフター・クロード』／アイリス・オーウェンズ（渡辺佐智江訳）／国書刊行会／ 2640 円
伝説の米作家（生年不詳～ 2008）によるこれまたクセもの奇作怪作、強烈痛烈にして、おまけにちょっとコワくもあります。恋人クロードと別れたハリエット（だからタイトルがアフター・クロード！）の地獄めぐりのごとき夜が彼女の独白で綴られるのですが、このハリエットのキャラクターがぶっ飛びすぎで、クロードがかわいそうになります。ハリエットが出くわすピミョーにカルト風味の面々もアヤシくて、そして奇妙にグロテスクでコワいラストへ一気呵成、４年前に出たアンジェラ・カーター『新しきイヴの受難』（国書刊行会）をちょっと思い出しました。

③『幸いなるハリー』／イーディス・パールマン（古屋美登里訳）／亜紀書房／ 2420 円
昨年もご紹介した米文学界のベテランにしてレジェンドであるおばあちゃん作家 85 歳の翻訳第３弾。昨年の評を「人生の断片をドライにジェントルにシュールに切り取って、なおかつカッコいい」としましたが、その作品世界のいわば続編、やっぱりいいです。日常のスケッチが枯淡に沁みます。既刊の『双眼鏡からの眺め』（早川書房）と『蜜のように甘く』（亜紀書房）も、ぜひ。

④『インヴィンシブル』／スタニスワフ・レム（関口時正訳）／国書刊行会／ 2420 円
『ソラリス』で知られるＳＦ界の巨匠スタニスワフ・レム（1921 ～ 2006）、国書刊行会の「レム・コレクション」第２期刊行がスタートしました。その第１弾が本書です。陸上生物がいない砂漠の惑星に着陸した宇宙船が消息を絶ちます。その調査に向かった宇宙船が生物のいないはずの砂漠で予想外の危機に直面します。ストーリーに触れるとネタバレになりそうな作品なので困るのですが、不穏なサスペンスがたまりません。ハヤカワ文庫ＳＦの旧訳『砂漠の惑星』が面目を一新、コレクション続巻が楽しみです。

⑤『死人街道』／ジョー・Ｒ・ランズデール（植草昌実訳）／新紀元社／ 2200 円
知る人ぞ知るランズデール久々の翻訳。本格的なノワール系ミステリやホラーからハチャメチャＳＦまで、とにかく職人芸で読ませて、私がいちばん好きなのは『モンスター・ドライヴイン』（創元ＳＦ文庫）です。本書はといえばホラー・ウエスタンとでもいいましょうか。帯の惹句も「魔界西部に、ようこそ。」とキメてます。さすらいのガンマン牧師が大西部の闇に蠢くバケモノたちと対決します。ホラーとウエスタン（それもマカロニ）がお好きなあなたなら大満足の連作短編集です。マジメにコワおもしろくおバカやってて、大好きです。

⑥『詐欺師の楽園』／ヴォルフガング・ヒルデスハイマー（小島衛訳）／白水社／ 1980 円
なんとまあ人を喰った小説です。20 世紀初めの東欧、絵画偽作の天才が世界の美術界と国家までをも手玉に取ります。彼が偽作したのは絵画のみならず、画家の存在そのもの、偽作の才能を引き継いだ甥っ子を巻き込んで、謎のスパイを妻にして、世紀の詐欺の顛末やいかに……と、どこかとぼけた筆致でぐいぐいと読ませながら、実は「おもしろうてやがて哀しき」境地へと読者を連れ去ります。著者（1916 ～ 1991）は戦後独文学「47 年グループ」のひとりとか（バッハマンが好きです！）。スラップスティックなエンタメとして楽しむもシュールなファンタジーとして愉しむも読者の自在に、いずれ強かな作品世界です。

⑦『小鳥たち　マトゥーテ短篇選』／アナ･マリア･マトゥーテ（宇野和美訳）／東宣出版／ 2420 円
スペインの作家（1925 ～ 2014）の短編集です。彼女の世界、とにかくいいです。都市ではなく田舎の物語、優美に幻想的でありながら、現実の残酷と酷薄が胸に迫ります。私にとっては昨年の『アコーディオン弾きの息子』に続くスペイン発の大収穫でした。ユージン･スミスのフォト･エッセー「スペインの村」を思い出しもしました。

⑧『短編ミステリの二百年６』／小森収編／創元推理文庫／ 1540 円
これから出る本です。この年末 20 日の発売予定です。だけど、全６巻の最終巻だから、既刊５冊は出ています。完結したらご紹介と思っていたのですが、タッチの差だからご勘弁いただいて、とにかくとんでもない全６巻です。たとえば第５巻なら大冊全 656 頁に 12 編収録、おどろくべきは編者による「短編ミステリの二百年」と題されたその解説が 271 頁です。全巻こんなバランスなのですから、解説だけで優に本格評論としてまとまる大迫力！　これから海外ミステリを読みたいみなさんには格好の入門書となるか、と。我らの世代なら江戸川乱歩編『世界短編傑作集』全５巻（創元推理文庫。現在はリニューアルされて『世界推理短編傑作集』となっています）が定番でしたが、今後はこちらでミステリの魅力を知る読者も現われることでしょう。刮目して完結を待ちます。

⑨『記憶の図書館　ボルヘス対話集成』／ホルヘ・ルイス・ボルヘス＆オズバルド・フェラーリ（垂野創一郎訳）／国書刊行会／ 7480 円
ボルヘス（1899 ～ 1986）のよき読者とはいえません。だけど、好きです。その「好き」の根底にあるのはボルヘス編のアンソロジー、あの『バベルの図書館』（国書刊行会から新編全６巻）の存在です。収録された作家・作品のおもしろさはもちろん、編者たるボルヘスの選択眼に強烈にあこがれました。本書はそのボルヘスが晩年にラジオで語った文学夜話をまとめたものといえばいいでしょうか。15 分ほどの番組だったようで、聞き手は詩人で評論家のフェラーリ、ラジオの語りらしくリラックスした文学談義でありながら、その言葉は熱量に溢れます。実は読み終わっていません。決して読む暇がなかったからではなく、通算 163 日間にわたる短い語りをラジオを聴くがごとくひと夜ずつじっくりと愉しんでいるのです。

⑩『生の館』／マリオ・プラーツ（上村忠男監訳・中山エツコ訳）／みすず書房／ 9680 円
これも読み終わっていません。やはり読み終えるのが惜しい本であり、じっくり読むべき本だと思います。イタリアの文学批評家･エッセイスト・美術品蒐集家として知られる著者（1896 ～ 1982）の、なんでしょう、ボリュームたっぷり自伝的長編美術エッセーでしょうか。自らの家に蒐めたコレクションを紹介しながら人生を回顧します。これはかくかくの経緯で入手したしかじかの作品であるなんて話柄に、青春の、家族の、戦争の思い出が絡まりあって、評論なのかエッセーなのか、独特の読みにさそわれます。なんとこの家、現在は美術館として公開されているそうです。なにかに魅了されること、それを学びきわめて蒐集することは、そのままその人の人生そのものなのだと深くナットクさせられて、こころが静かに鎮まる、そんな本です。読むクスリです。ゆっくりと読みます。